



Y E L L

Vol.
28

能登大地震で被災 喫茶店「中央茶廊」オーナー 窪さんの挑戦

「今年元日に起きた能登半島の大地震。甚大な被害を受けた石川県七尾市の中心街で、半世紀以上、地域住民から愛されてきた「中央茶廊」も酷いダメージを受けました。

自分の店だけでなく、被災した地域全体、そして仕事や生活が激変した住民、仲間たちの復活に向けて活動を続けているのが、同店オーナーの窪丈雄さんです。「地震で被災したことは不運だけれどそれで終わりじゃない。毎日の生活の中で、小さくてもたくさんステキな発見をして、幸せや奇跡や運命的な出来事を実現していきたいですね」。そう話す窪さんはこれまで多くの困難を乗り越えてきました。

窪さんの挑戦と復興に向けた思いを紹介いたします。



3月から始まった屋台村の店舗

江戸時代生まれの祖父と 明治生まれの父

窪さんは昭和41(1966)年、七尾市に生まれました。江戸時代最後の元号となる慶応元(1865)年生まれ、祖父丈太郎さんがちょうど100歳、明治44(1911)年生まれで56歳の父政雄さん、先妻・先々妻との離別・死別後の3人目の妻となった実母静子さん、そして窪さんとは母の違う2人の姉に囲まれて育ちました。

父政雄さんはパチンコ店を経営し、事業も手広くやっていました。窪さんは「パチンコ業界はあまり良く言われておらず、高校を卒業したら七尾を出て、大学に進学してそのまま違う場所就職する。親と違う人生を生きていくのだ」と決意していました。その思いの通り、七尾高校を卒業すると都内の専修大学へ。その頃、政雄さんは窪さんにパチンコ店を継いでほしいと思っていたようですが、窪さん自身は「長男が家を継がなくても良いだろう」と思っており、2番目の姉の夫がサラリーマンを辞めてパチンコ店の経営者になっていました。窪さんが大学を卒業する時期はバブル経済真っ盛りで、卒業後は東京に本社がある証券会社に就職、札幌支店に配属されました。

「北陸の石川県出身なので、会社では『雪が多くて寒い地域でも大丈夫だろう』と、思ってた。北海道に配属されたのかもしれない。と窪さん。営業マンとして朝早くから夜遅くまで、当時のエナジードリンクのCMのように「24時間闘う」社会人生活を送りました。1993年、七尾高校時代から付き合い始め、長年遠距離恋愛を続けてきたきよ美さんと結婚。

「それまで人と話すのが苦手、会話も極力避けていたのですが、営業職になつた以上、無理やりにもやらざるを得ない状況になりました。でも、やってみれば、それなりに成績も上がり、気が付くと人と話すのがそんなに苦手ではなくなっていました。この営業経験があつたから、初対面の人も話せるようになった面があると思います」。

父が倒れ、 パチンコ店を継ぐ

そんな社会人生活が5年を迎えた1994年、父政雄さんの体調が急変し、その年の10月、政雄さんは帰らぬ人となりました。82歳でした。

政雄さん亡きあと、パチンコ店の後継者を決めなければならなくなりました。静子さんは「丈雄、七尾に帰って来い」と。そして2番目の姉も「丈雄が店を継ぐべ

きた」となり、窪さんは「仕方がない。やってみるか」と、翌月の11月、証券会社を退職。前の年に結婚したきよ美さんとともに故郷の七尾市に戻りました。

戻るとすぐに義兄(2番目の姉の夫)とともに経営事業に参画しました。ところが実際に店の状態を見てみると、経営状況はあまりにもずさんで酷い事態に陥っていました。借金もあり、そして赤字が続いていました。銀行からも「どうかしてくれ」と言われる始末。そこで窪さんは経営改善に注力しました。3か月、身を粉にして経営の立て直しに奮闘するなかで、義兄が店の経営を『辞める』と言ってきた。次第に経営の課題だけでなく不正も発覚。危機的な状況が続くなかでも、それから1か月は仕事の引き継ぎに集中し、1995年の5月、窪さんは20代半ば過ぎの若さで、一人で一手に経営を担うことになったのです。

「七尾に帰ってきたからには立て直さないといけない」と真剣になりましたね。私は右も左もわからない、完全に業界の素人である状態で、がむしゃらに経営改善に着手しました。義兄から辞職の申し出があり、『3か月やって仕事を覚えるから、義兄さんは好きにしていよいよ』と、言い、それからがむしゃらに取り組みしましたね。父の事業を立て直そうと奔走した日々を振り返ります。



中央茶廊の前で、静子さん(29歳ころ)



昭和39年ころの中央茶廊

母の店「中央茶廊」へ 経営参画

窪さんはその後17年間、パチンコ店の経営を続け、2011年2月20日に店を閉じました。2000年代に入ると、全国各地での動きと同様に、大手のパチンコ屋が全国展開を始め、七尾市にも進出してきました。窪さんの店のように地元の中規模資本のパチンコ店はほとんど廃業していきました。窪さんもいろいろなアイデアを出しながらなんとか続けてきましたが、閉店を決定します。

「母が七尾市の中央通りで喫茶店『中央茶廊』を経営していました。その店を将来は母から継ぐ予定で、私は母の下で喫茶店に入りました」。

「中央茶廊」は七尾市民なら誰でも知っている老舗中の老舗の喫茶店です。母静子さんも父政雄さんに負けず劣らず、実業家のセンスを持ち、開店は窪さんが生まれる5年前の1961(昭和36)年。喫茶店がほとんどない時期に始まり、4、5人もウエイトレスを雇っていました。「当時、初任給が2万円だった時代、一日の売り上げが10万円以上もありました。今なら100万円近くになりますよね。多くのお客様、常連様にご利用いただいて、母たちは朝から晩まで目の回るような忙し

さでした」と窪さん。

開店した直後からその後の人気ぶりで、地域での話題は目を見張るものでした。「お見合いの場所なら中央茶廊」が定番になったり、店の裏にある銀行から会議用のコーヒーの出前注文があったり、お昼には行員もお茶を飲みきたりということからも伺えます。七尾市は、かつて石川県でも最も大きい貿易港・七尾港がありました。1960年代から70年代には、能登島と七尾をつなぐ能登島大橋がまだできておらず(能登大橋完成は1982年、昭和57年)、金沢と能登島を往復する人は、能登島からフェリーで七尾港に来て、そこから金沢に向かいました。そうした人たちが一服して休んでいたのが、中央茶廊でした。

その頃の様子を、窪さんは今でもありありと思い浮かべます。「当時はまだ子どもでしたが、七尾はとても賑やかで、中央通りや商店街では、お互いの肩がぶつかるぐらいお客さんが押し寄せていました。その後、モーターゼーションの進展で減ってきましたが、忘れられない七尾の光景の一つです」。

話が戻りますが、2011年に窪さんが中央茶廊に入った時、オーナーである母静子さんは窪さんに「コーヒーについてしっかり勉強してくるよう」と、コーヒーを学ぶよう厳命します。そこで、窪さん

は、金沢市内で開催された教室に参加しました。これが窪さんにとっては本格的にコーヒーに取り組みきっかけとなりました。45歳の時でした。

「教室に行ってみて、驚きました。既に喫茶店を経営している人がコーヒーについて知らない、勉強していない、ということ。コーヒーは利益率が高い商品で、そこに甘えて勉強しないままに商売をやっている。でもこの業界にいるなら、知識は大切なのに……」と思ったら、「コーヒーを勉強した上でしっかりと経営をしよう」と思いました。

さらに窪さんはうれしい体験をします。「大手の業者さんから焙煎した豆を買って入れたコーヒーと、自分で焙煎したコーヒーを飲み比べたら、どうみても、自分が焙煎した方がおいしい。だったら、焙煎技術を磨いて、お客様においしいコーヒーを飲んでいただきたい、と思いました。実際にやってみるとプロとして、毎回同じ味を出すこと、そしてさらに進化していくことなど、大変で難しい部分もありました。でもお客様と一緒にだから、『前の豆よりおいしくなった』と味の評価をしていただけるのもうれしいですね」と窪さん。

そして約10年間、母静子さんと店をやりに、完全に店を引き継ぎました。「パチンコ店の時は突然の経営参画でしたが、今回は10年間の引継ぎ期間があり、うまく

いきました」。長年、七尾市の喫茶業界をリードしてきた静子さんは2022年、86歳で永眠しました。亡くなる2日前まで店に立ち、お客様のために、おいしいコーヒーとくつろげる時間を提供し続けたあっぱれな人生でした。「最後まで仕事場に立ち続けた母の仕事ぶりが、私の大きな指針になっています」。



お店のカウンターにはありし日の静子さんの遺影が、お店を見守っているかのようです



大地震前の店内

突然の白血病発症

喫茶店の経営も順調で、充実した日々を過ごしていた2020年、今から4年前のこと。予期せぬ出来事が起きます。白血病であることが偶然にも分かったのです。

「太ももの前側の筋肉が両足とも痛くて、かかりつけ医の痛風外来に行きました。先生が『とりあえず血液検査をしてみましようかねえ』と。検査結果を見て先生は『すぐに金沢市の病院に行きなさい。白血病かもしれない』と。そして忘れもない2月5日、その朝、娘の大学の合格発表の日で、合格を確認して、病院に行き、白血病の診断を受けて一旦家で準備をした後、その日のうちに入院しましたと窪さんは激動の1日を振り返ります。

当時は、水泳選手の池江璃花子選手が白血病になったことが話題に上がっていたころ。再検査後、担当医から骨髄移植しか治す方法がないと説明を受けました。入院中は一日に何度も大腿部に激痛が走り、検査漬けの毎日。2月8日から約1か月間の抗がん剤治療がスタートし、大変な闘病生活が続きました。

医師から言われた治療の決め手となる骨髄移植には、提供者(ドナー)が必要で、実は窪さんの一人娘がドナーになりました。娘は不妊治療の末、妻きよ美さんが

35歳の時に生まれた子どもでした。「その子の骨髄移植で今の私がある。あの時、子どもを作ることを諦めていたら今の私はない。嫁さんが『子どもが欲しい』と言ってくれたおかげで、今の私があるのです」。そして骨髄移植(造血幹細胞移植)も成功し、少しずつ快方へ向かっていきました。

入院中、窪さんは「ツイている」「ラッキーだ」と思うことがたびたびあったといいます。「入院している間、ダイヤモンド・プリンセス号のコロナ患者のニュースを見ていました。もし白血病とわからなかったら、そして感染してしまっていたら、そう考えると、白血病が早期に発見されて無菌室に隔離されていること自体すごく幸運なのではないか、と思えてきました」という。そして、同級生で首から下が動かない、障がいを持った友人が窪さんを心から応援してくれました。小学校から高校まで一緒の学校で、しかも中高と同じ部活だった「大心友」です。電動車いすの生活ながらリハビリで体が動くようになった体験があります。「あいつを見ていて、体は病んでも、心を病む必要はない。病気を抱えても、心まで病人になる必要はないと思います」。病棟では一度も病院着を着ないでTシャツを着て過ごしました。また、病院の食事では献立を書いた紙が付いてくるのですが、窪さんはその紙



入院中の窪さん。病院着ではなくTシャツを着て、病棟の人気者でした

に毎回「ごちそう様でした」と書いて返信していました。するとそのうち、栄養士さんが「返事を書いてくれる人はどんな人か会いに来ました」といって無菌室の前まで来てくれて、雑談をしてくれました。

病院の婦長さんへは雑談の中で「ホスピタル(病院)に一番足りないのはホスピタリティだ。これからの仕事ってAに取って代わられるという話があるけど、『愛』のある仕事なら絶対に代わられることはないよ」とも話して。

「池江選手も復活したように、白血病は

治る病気になりつつあるのですよ。ここ数年は生存率が上がっているのに、患者が見せられる生存率は過去20年のデータ。よく考えたら、私にとっては1か0かしかないわけです。1になるか0になるかはしょうがないとその時思ったのですよね。そういうことを考えて4年経って、今こうやって生きているということは、生きていれば何とかなるな、というようにも思っています」と窪さんは治療の日々を振り返ります。

入院中、窪さんは「ツイている」「ラッキーだ」と思うことがたびたびあったといます。「入院している間、ダイヤモンド・プリンセスのコロナ患者のニュースを見ていました。もし白血病とわからなかったら、そして感染してしまっていたら、そう考えると、白血病が早期に見えられて無菌室に隔離されていること自体、すごく幸運なのではないか、と思えてきました」という。そして、同級生で首から

下が動かない、障がいを持った友人が窪さんを心から応援してくれました。小学校から高校まで一緒の学校で、しかも中高一と同じ部活だった「大心友」です。電動車いすの生活ながらリハビリで体が動くようになった体験があります。「あいつを見ていて、体は病んでも、心を病む必要はない。病気を抱えても、心まで病人になる必要はないと思います」。病棟では一度も病院着を着ないでTシャツを着て過ごしました。また、病院の食事では献立を書いた紙が付いてくるのですが、窪さんはその紙に毎回「ごちそう様でした」と書いて返信していました。するとそのうち、栄養士さんが「返事を書いてくれる人はどんな人が会いに来ました」といって無菌室の前まで来てくれて、雑談をしてくれました。

病院の婦長さんへは雑談の中で「ホスピタル(病院)に一番足りないのはホスピ

タリティだ。これからの仕事ってAiiに取って代わられるという話があるけど、『愛』のある仕事なら絶対に代わられることはないよ」とも話して。

「池江選手も復活したように、白血病は治る病気になりつつあるのですよ。ここ数年は生存率が上がっているのに、患者が見せられる生存率は過去20年のデータ。よく考えたら、私にとっては1か0かしかないわけです。1になるか0になるかはしょうがないとその時思ったのですよね。そういうことを考えて4年が経って、今こうやって生きているということは、生きていけば何とかなるな、というようにも思っています」と窪さんは治療の日々を振り返ります。

能登大地震が発生

そしてあの日がやってきます。元日の午後。窪さんはちょうど自宅でお酒を飲んでくつろいでいると最初の揺れが来ました。「去年の5月ほど揺れないなあ」と思っていると、次に巨大な揺れが来ました。「家族と一緒に行動しなければいけない」と思っているうちに大津波警報が出て「今すぐ避難するように」という指示が出されました。自宅は海から1キロ程度の場所ですが、窪さんは「日本海にはプ

レートがないから津波が来ても大津波にはならない」という考えがありました。が、家族は「高台に逃げよう」と避難を促しました。そこで午後4時から1時間ぐらい、高台にある城山体育館の駐車場に避難。その後、車で5分ぐらいのところにある義理の妹夫婦の家へ避難しました。車で移動する中でも、道路には割れ目が走り、登録文化財に指定されている建物も民家も壊れ、液状化でマンホールが隆起。まるで地獄絵図だ。そういう思いが浮かぶほど、市街地の風景は地震前とは大きく変わっていました。

夜になってだいぶ余震が収まってきたので、窪さんはずっと心配だった「中央茶廊」を見に行きました。中心市街地にある店舗は、外から見ただけで建物がかんであるのが分かり、中はぐちゃぐちゃ。天井は平衡感覚がなくなったと思うほど斜めになり、食器は3分の2が落ちて割れ、製氷機は天井が崩れ落ちたために閉められない状態に。

ただ、お店の象徴でもあったカウンターのステンドグラス、昭和44年製造の現役の球形のスピーカー、お店の心臓部でもある焙煎器は奇跡的に無事でした。余震の続く中、年末に製造したドリップパットをなんとか持ち出すことができました。

地震の前、七尾市が舞台になった人気漫画『君は放課後インソムニア』(『君ソム』)が話題となりました。窪さんが卒業した七尾高校が舞台で、モデルになった主人公は窪さんの同級生です。窪さんは商店街や地域の人たちと協力して、「聖地巡礼ツアー」と称してゆかりの場所を巡るツアーを企画開催しました。すると、小学館の編集者や作者のオジロモトさんも参加してくれて、その後のアニメ化で「中央茶廊」が登場(口ケ地)しました。ファンにとっては大切な「聖地」の一つである「中央茶廊」がぐちゃぐちゃになってしま、窪さんは衝撃で言葉もありませんでした。



震災直後の中央茶廊



福島ひまわりプロジェクトの
半田さんからの救援物資

窪さんの自宅は、停電にはなりませんでしたが断水になっていました。風呂も、電気温水器が水道につながっていただけで使えません。ところが幸運だったのは、窪さんの家ではたくさん井戸水を掘っていて、現在まで止めていなかったため、トイレに水を使うことができました。正雄さんが生前、パチンコ店の駐車場などの雪を水で解かすため、たくさん井戸を掘っていてくれたのです。「うちはそういう面でも守られていた、と感じました」と窪さんは父の「遺産」に感謝の思いを語りました。

奇跡的な出会いが次々

窪さんが被災地で活動を続けていると、たくさんボランティアが駆け付け、支援物資も寄せられ、奇跡的な出会いが次々に起きました。

ご縁の大切さを説く作家で小説家の志賀内泰弘さん(愛知県名古屋市長)や、東日本大震災と原発事故に遭った福島で「福島ひまわり里親プロジェクト」をしている半田真仁さんが次々に支援してくれ、現地にも駆け付けてくれました。

また『君は放課後インソムニア』(『君ソム』作者のオジロさんと、小学館の編集者は、地震の影響や被害状況を非常に心配してくれて、5月の連休には七尾で絵を描くライブイベントを開催してくれました。「涙が出ました。この出来事があったから、私の中で『店を再開するのだ』というのが1つの大きなモチベーションになりました」と窪さん。

また、4年以上前から、TBSのアナウンサー安住紳一郎さんを七尾市に呼ぼうと、日本で初めてカニカマ(蟹のかまぼこ)を開発し製造・販売した地元企業「株式会社スギヨ」の広報担当者にアドバイスをし、企画を考えていた窪さん。ずっとアプローチを続けていたおかげで、地震の後、安住さんの番組で七尾市でのロケが実現しました。

カニカマレディ田畑利杏里(りあり)さん、
安住さん、窪さんのスリーショット



インソムニアコーヒー

「夢とか希望とかを超えて、奇跡が現実になっているような気がしますね。自分が想像したことは実現するのだ!と考えると、楽しくてしょうがないですよ。奇跡が起きないわけがないのですよ。そして思うだけじゃなくいろいろな奇跡を実現していきたいです」。

「中央茶廊」は、震災後、残ったコーヒー豆でドリップパックのコーヒーを製造・販売しました。その際には、先ほど紹介した七尾市が舞台の漫画『君は放課後インソムニア』の主人公、曲伊咲(まがりいさき)をデザインしたパッケージデザインを作者のオジロ先生と小学館からご提供いただきました。「インソムニア」とは、「不眠症」という意味なので、不眠症の人が飲んでも眠れるカフェインレス(カフェインなし)のコーヒーにしました。

現在は、金土日のみ、駅前の複合施設の中のパトリア(屋台村)で営業をしている。7月の下旬に七尾市の仮設店舗の建設が完成し、8月中旬にはその店舗に移る予定になっています。窪さんが思い描く復活の日は、着実に近付いてきています。

採用と教育研究所

saiyo to kyouiku kenkyujo

志ある中小企業経営者の応援団として「採用から共育」まで一貫した支援サービスを行っている。これまで数多くの社員、職員の採用・人財育成・職場定着等に携わり、CSR(社会貢献活動)を活用した「いい会社創り」のサポーターとして定評がある。



YELL

Vol. 28

2024年8月8日

発行：採用と教育研究所

〒960-8055

福島県福島市野田町6-7-8

電話 024-529-5153

info@saiyoutokyouiku.com

